



寄り添う心

夏休みに入り、学校も一段落という頃でしょうか。それとも、「いやいやまだまだ、教育相談が残っています。」という先生方が多いのでしょうか。

さて、この一学期、多くの学校を訪問させていただきました。その中で児童生徒の心に寄り添ったかかわりに出会うことができました。そのかかわりの一つを紹介します。

A 君は活発で授業中の発言も積極的。「はい！はい！は～い！」と担任の発問に対して即、手を挙げて発表する。しかし、学級の中では少々浮いた感じの A 君。そんな A 君は板書を写すことが苦手で、ノートが一番上にその日のめあてを書いただけであとは全く書こうとはしない。担任は授業の最後に「じゃあ、みんなまとめを書いて。」と板書を促すが A 君はふんぞり返ってむだ話を始める。そんな A 君に担任が「A 君、書けた？」と声をかけると、「大丈夫！書かなくとも分かる～」と板書を写さずして済ませた。

さあ、担任はこの A 君にどんな寄り添い方をしたのでしょうか？

担任は、「分かった。じゃあ、ここから、ここまでを 10 回唱えて。」と板書すべきところを指示し、書くことを強要せず、唱えることで書くことの代わりを A 君に提案した。すると A 君はずっと自分の席を立ち、黒板の前に座りブツブツと板書してあった内容を小声で唱えはじめた。A 君は 10 回唱え終わると「先生、終わったよ。」と自分の席に戻っていった。その表情はすっきりとしていた。その後、担任から A 君が書くことを拒むので声に出して確認させることで学習の定着を図らせていることを伺った。

A 君のノートを見てみた。すると文字は乱雑で形が取れていない。書けば書くほど乱雑な文字が、ノートいっぱい広がっている。そんな状態を担任は理解していたのだと思われる。書くことで学習の定着を図ることだけが、定着の方法ではない。A 君にとっては唱えることで音声による確認の方が、学習内容が理解できたのであろう。その後、A 君は最後のまとめをしっかりと聞いていた。授業中、「はい！はい！」と大きな声を上げていた A 君ではなくなり、うん、うん、とうなずきながら授業のまとめを聞いていた。

このクラスにはもう一人 B 君という多動な子もいる。その B 君に対しても担任の B 君に寄り添うかかわりがあった。「静かにしなさい！」「席に着きなさい！」という言葉ではなく、B 君の脇に座り、「どこまでできた？」という言葉かけた。その後、B 君は席に戻り、課題に取り組むことができていた。

このような光景を見ると、いろいろな子が同じ場でどのようにして学ぶか。学び方のバリエーションを考え、個々に応じた学びのスタイルを考えることが楽しくなってきます。

子どもたちの「分かった！」という笑顔を引き出す 2 学期にしたいと感じました。



『仏様の指』

『仏様がある時、道端に立っていらっしやると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこは大変なぬかるみであった。車はぬかるみにはまってしまって、男は懸命に引くけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。』

その時、仏様は、しばらく男の様子を見ていらっしやいましたが、ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男はひいていってしまった。』

大村はま著

「教えるということ」より



この話を思い出すたびに、教師としての存在の意味を考えます。子どもたちが「自分でできた、分かった！」と思って前に進んでもらうことが、教師の役割なのではないかと思えます。

「自ら学び、自ら考える。」
「できた！わかった！」
という自信をもって前に進める子どもたちを背中から応援したいと思うのです。

子どもたちが卒業して、私のことを忘れても、別に構わない。子ども達は後ろを振り向かないで、どんどん行ってもらいたい。

大村はまの言葉

《 講演 佐藤 学先生 》

「探究と協同の学びのイノベーション — ポストコロナ時代の授業改革と学校づくり — 」

今年度第1回目の授業づくり研修会が須賀川市立第二中学校にて、佐藤学先生をお迎えして開催されました。5校時、野地教諭の2学年社会「日本の地域的特色」授業の後、佐藤先生の講演へと進みました。

講演では、午前中の学校全体の参観ならびに野地教諭の授業を受けて、三つのお話がありました。

- 1 野地先生のクラスから学んだこと
- 2 全クラスから学んだこと
- 3 講演のテーマに関わる内容

まず最初に、探究の学びは協同でしかできない、探究のない協同は学校教育では無意味であるということから始まって、イノベーションには一挙に全体を変える破壊的な意味と持続的な意味の両方があることをお話しされました。また、日本の教師の「よいところ」として、子どもを「待てる」点と、子どもの「わからなさを共有できる」ことが国際的に評価されているとのことでした。



続いて社会科の学びは教科書では教えられず、資料と課題を通して、いかに社会と出会い、社会を知るかにあると指摘され、その点で今日の野地先生の授業は資料と課題において実にチャレンジングで意味深いものであったとお話がありました。

須賀川二中全クラスについては、子どもたちがつながり合い協同で探究的によく学んでいる姿に言及され、学校全体の取り組みを貴重な姿であると評価されました。

その上で、全国的に学び合いや協同学習が広がる中で、新しい課題も生じているとして、教師だけの授業はもちろん問題だが、子どもだけの授業も問題であり、全体とグループのあり方、共有とジャンプの課題について、ステージを分けて考えようという指摘がありました。共有の学びは作業化していいいに、ジャンプの学びは大胆にという基本や、全体での確認が足場かけになるので、どこまで行けたかを共有したり、わからなさを共有したりして足場かけをいいいにして大きなジャンプを生み出すという示唆もいただきました。

さらに真正の学びについて、各教科ごとにていいいにお話があり、例えば算数・数学は量と空間形式の科学であり、ワークシートは[式・答え]ではなく[図・式・答え]として量の感覚を育てましょう。

国語(文学)は真実を描いているが因果関係ではなく不条理を描いている、その不条理に自分自身の触れ方で触れ対話する、そしてテキストに惚れ込む…と言ったお話がありました。各教科のお話がありましたので、参加できなかった方は同じ学校で参加された方に「どんな話だった」と尋ねてみるとよいと思います。

須賀川二中の生徒さん、先生方のおかげで、貴重な学びを得ることのできる一日となりました。ありがとうございました。

夏休みに入り、教育研修センター・支援センターでは夏季セミナーが開催されています。夏季セミナーに参加される先生方は体調管理に十分ご留意なされ参加くださいますよう職員一同お待ちしております。また、夏休みは心身ともにリフレッシュし、2学期さわやかに迎えられますようお過ごしください

